

## 摂津国風土記散歩 19

## 有馬郡幡多郷を歩く

## 宅原遺跡群(神戸市)を見る

寺岡 洋

## はじめに

平安時代(937年)に編纂された古代の百科事典「倭名類聚抄(わみょうるいじゅうしょう)」によると、律令制下の摂津国有馬郡は、春木(はるき)、幡多(はた)、羽束(はつか)、大神(おおみわ)、忍壁(おしかべ)の五つの郷(幡多、忍壁は上下二郷あったようだから、七郷かも)からなっていた。郷(ごう)は靈龜元年(715年)に里から改称されたもので、「風土記散歩」のメインである、『播磨國風土記』が編纂された頃は郷ではなく里であった。

各郷の位置は正確には分らないが、およそ三田盆地の北部が忍壁、南西部が幡多、有馬温泉のある南東部が春木郷に比定されている。

この五(七)ヶ郷のうち、幡多郷は秦氏の居住と関係あるのではないか、とは誰でも考えるところであろう。武庫川と並んで大阪湾へ南流する猪名川中流域には、豊嶋郡(てしまぐん)秦上・秦下郷が存在しており、秦氏の拠点であった(寺岡「猪名川左岸(池田市)を歩く—秦氏の集住地 豊嶋郡秦上・秦下郷—」『むくげ通信』194 2002.9)。

しかし、有馬郡の幡多郷については、現在まで「倭名抄」以外の文字資料はみられず、木簡(もっかん)や墨書(ぼくしょ)土器に秦氏の名は登場していない。ただ、八多(はた)の地名が広く残るのと、八多川の名称のみがその遺称とされる。

幡多の地を東流あるいは北流し武庫川に合流する長尾川、八多川、有野(ありの)川、有馬川流域では、圃場整備・宅地造成などにより多くの発掘調査が行われている。なかでも、長尾川流域の宅原(えいばら)遺跡群では、当時、倭の地においては見ることが稀な遺物が出土しており、有力な渡来系集団の移住が推測できる地である。

来住した集団が秦氏と同族かは不明だが、幡



多郷(里)の母体になった集団であったのは確実であろう。今号はあまり知られていない幡多の地、宅原遺跡を紹介したい。

## 宅原(えいばら)遺跡群の位置

六甲山系の北になる北摂地域は、武庫川の流域に小平野が形成されている。武庫川本流には三田市域の平野域が広がり、各支流には細長い河谷平野がみられる。今回紹介する宅原遺跡群は東流する長尾川流域になる。

現在の行政区画では神戸市北区長尾町宅原(図版 長尾と表示する辺り)。北側の低い丘陵により三田(さんだ)市域とは隔たっている。西から延びる丘陵は現在の感覚では低いが、国道176号線も丘陵を避けて大きく東に迂回しており、神戸電鉄三田線は横山峠を抜けている。

周辺地域で注目されるのは、北へ3km地点の三田市貴志(きし)地区。倭王権の外交を担ったとされる渡来系集団、吉士(きし)の居住と関連すると考えられている。貴志の西、丘陵一帯を開発した北摂ニュータウン内では、渡来色濃い遺跡群が調査されている(寺岡「貴志遺跡群と吉士集団」『むくげ通信』155 1996.3)。

八多川、有野川、有馬川は北流し、神鉄道場(どうじょう)駅の東あたりで合流する。ちなみに、神鉄三田線は有野川沿いを、JR福知山線(宝塚線)は武庫川本流沿いを走る。

これらの河谷平野には条里制(じょうりせい)の名残である条里地割が最近まで残っていた。有馬川流域から横山峠を経て三田に残る地割には、条里方格中に余剰帶(一町は109mで、さらに18m幅広になっていた)が認められ、この余剰帶は山陽道・南海道などの類例から古代道路の痕跡

と考えられている。この計画道路は、「単に難波から丹波国へ通ずる交通路ではなくて、……、難波に都が置かれた時期(孝徳・天武・聖武期)、ことによると飛鳥・藤原に都が置かれた時期にも存続し続けた古山陰道ではなかつたか。……」(吉本昌弘「摂津有馬郡を通る計画古道と条里」「歴史地理学会会報」104 1979)と推測されている。有馬温泉には舒明・孝徳天皇が湯治に来ており、すでに古代道が想定されている。

推定・古山陰道については、現在、道路遺構の発掘例は知られていないが、推定古道に沿って装飾大刀や渡来系文物を副葬する古墳が点在することなどから、古墳時代後期にまで遡るのでないかと考えられる。

宅原遺跡内を通る県道17号線(三田・西脇線)に沿って西へ行けば、吉川(よかわ)、東条、社(やしろ)と播磨北部地域につながり、古代においても加古川上流域とを結ぶ古道が想定される。

県道沿いには、持鹿(はしか)廃寺(東条町)、喜田清水遺跡(社町)、野村廃寺・八坂廃寺(西脇市)などの古代寺院跡が点在する。ちなみに、中国自動車道もほぼ同じルートを経由している。

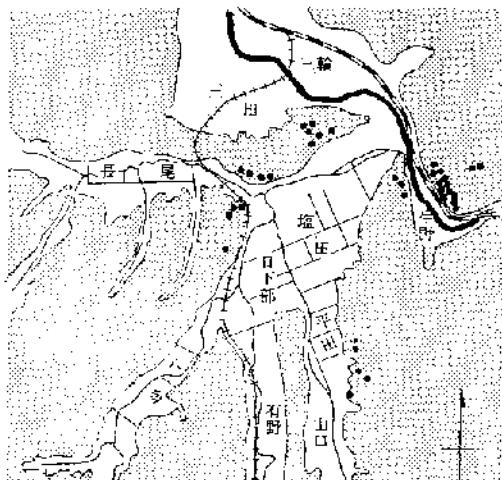
宅原遺跡の立地には、日本海ルートと共に播磨北部との視点も必要と思われる。

### 宅原遺跡群の概要

宅原遺跡群は当初、長尾川流域における圃場整備による調査により知られ、さらに南側丘陵一帯の開発(北神ニュータウン)に伴う道路工事などにより断続的に調査がなされた。調査の主体となつた神戸市教委からは「報告書」が刊行されておらず、年別に刊行される『神戸市埋蔵文化財年報』は精粗の差があり、重要な遺物の未報告、説明抜きなどの事例が散見する。

宅原遺跡は調査の進展に伴い、十数ヶ所の調査地区毎に名称がつけられており、宅原遺跡群とするのが適切であろう。今回は関連する地区的みの紹介になる。中世の遺構・遺物にもみるべきものが多いが、ごく簡単に触れたい。

遺跡の範囲は、長尾川の両岸に東西約1.5km、南北約1kmで、南側の丘陵から低い尾根が數本延びており、各地区に分れる。川沿いは年代が明らかでないが、条里地割が残っていた。



道場を中心とする条里制遺構  
(長尾・八多・山口を含む)  
(直線距離約900mの火創削にみられる条里制遺構、白線は武庫川)

調査地区は、おおまかに、右岸(南岸)の一ノ宮神社の西側辺りが豊浦、そして順に東へ、宮ノ元、岡下、辻垣内(つじがいち)地区と続く一帯で、古代の主要な遺物・遺構が検出されている。

宅原遺跡群の集落と関連する古墳は、南側丘陵に小規模な古墳が散在する程度であり、群集墳を形成していない。ただ、皮袋形土器の出土が目につく。規模の大きな横穴式石室をもつ古墳は流域が異なる日下部(くさかべ)地区にのみ見られ、終末期古墳は存在しない。日下部の地名は、草香部(くさかべ)吉士と関連すると憶測している。

古墳(群)のこのあり方は、長尾川流域の本格的な開発の時期が、古墳時代後期より下ることを意味するものであろう。

まず、地区毎の主要な遺構・遺物を挙げると、

#### 豊浦地区

##### 大溝

墨書き土器「五十戸口」「郷長」「田木」「山代」  
掘立柱建物群、灰釉・綠釉陶器

#### 宮ノ元地区

大溝(祭祀遺構・遺物) 龜形石造品 人形  
木彫面 馬骨 円面硯 人面墨書き土器  
墨書き土器「五十戸」「田木」「池邊」  
溜池堤 植 余水吐(よすいぬけ) 馬齒  
竪穴住居群 掘立柱建物群

#### 岡下地区

##### 大溝 陶硯

墨書き土器「評(こおり)」

#### 辻垣内地区

豊穴住居(カマド)、鍛冶工房(鉄滓)  
大型掘立柱建物  
などが挙げられる。

### 辻垣内地区の渡来系文物 カマド、大鍛冶

もっとも時代がさかのぼる渡来系文物が出土した辻垣内地区(右、図の8)から紹介したい。

北神ニュータウンへの工事用道路のため調査され、周辺に古墳～飛鳥時代集落が広がると想定されている(「昭和58年度 年報」1986年、「58年度 現況資料集」)。

豊穴住居跡から、5世紀前半の造りつけカマドが検出され、県内でも最も古い時期になる。この時期のカマドは渡来系家族の指標になり、早い時期の渡来系小集団の移住は注目される。

このカマドは作りかたが通常と異なり、カマド部分を掘り残して作られており、「青野型カマド」とよばれる京都府綾部地域で見られるオンドル状遺構(L字形カマド)と同じ手法であり、興味深い。

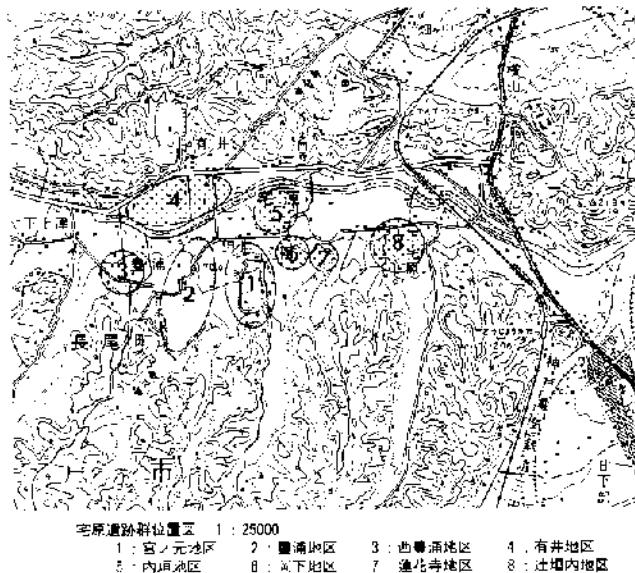
6世紀代の豊穴住居では、7.8×8.0mという大型の豊穴住居跡からアメ状の鉄滓(てっさい)が出土し、大鍛冶(おおかじ 精練工程、鉄器製作の前段階)の工房跡と推測されている。鍛冶も主として渡来系住民の生業と考えられており、継続して渡来系集団が集落に居住していたようである。

6世紀末～7世紀初頭には、7間×2間(13.1×3.7m)の長大な掘立柱建物も作られているが、残念ながら建物の用途は不明。宅原遺跡群には、有馬郡衙(前身組織である評衙)、あるいは幡多郷(里)に関連する官衙施設が存在するはずだが、現在まで遺構が確認されていない。

辻垣内・大前地区では、平安～鎌倉時代の大規模掘立柱建物も多数見つかり、「宅原莊」との関連が推測されている。

鍛冶工房とみられる遺構は有井地区でも1棟検出されている(「昭和61年度 年報」1989)。

有井地区(右上、図の4)は長尾川の北岸になり、古墳時代前期～後期の19棟の豊穴住居が調査された。うち1棟では、床面のほぼ全域からスラグが出土しており、フィゴ羽口も1点出土した。スラグの組成は、鉄を主成分とし、銀、銅、錫などを若干含んでいた。どのような金属製物質の加工作業が行われたかは、不明とされる。



### 岡下地区 大溝、墨書き土器「評」、陶硯

同年度に2ヶ所、調査された(図の6)。北神中央線新設工事の調査では、飛鳥・奈良～平安・鎌倉時代に至る各種の遺構・遺物が見つかっており、圃場整備関連の調査では掘立柱建物群が注目される(「昭和60年度 年報」1988年)。

道路新設工事に伴う調査では、南北に長い調査地の北半に、大溝が約110m検出された。丘陵上を流れる大溝は、幅約6m、深さ2mの大規模なもので、溝に投棄された遺物からみて、飛鳥時代中頃に造成されている。

この大溝から出土した須恵器杯蓋(つきふた)の内面に、「評(におり)」と墨書きがあった。墨書きは容器の所有者・所有役所を記したものと考えられ、周辺に評の施設が存在した可能性が想定でき、特筆される遺物である。

「評」は大筋として「郡」と同義で、大宝律令施行(701年)以前は「評」、以後には「郡」を使用したとされる。ただ、評の制度の実態については不明な点がまだ多い。

当該「年報」に記載ないが、陶硯(とうけん)も出土しているようだ。もし、飛鳥時代の陶硯であれば、きわめて初期のものとして類例が限られ、地方の出土例として貴重である(西口壽生「畿内における陶硯の出現と普及」「古代の陶硯をめぐる諸問題」奈良文化財研究所 2003.12)。

圃場整備では、2群・6棟の掘立柱建物群が検出された。時期は奈良時代のようだ。

豊浦地区 大溝、墨書き土器「五十戸口」  
 「郷長」「田木」「山代」  
 皮袋形提瓶

豊浦地区(図の2)では圃場整備に関連する調査が断続して行われた。調査順に紹介したい。

—「昭和62年度 年報」(1990年)—

7世紀後半に掘削された大溝2条が確認されている。宅原遺跡群の特徴は大溝にあるようで、岡下地区・宮ノ元地区でも検出されている。

大溝の灰色粘土層中より、墨書き土器が出土した。8世紀代の須恵器杯蓋の内側に、「五十戸口」と書かれていた。この「五十戸口」は、律令制下における地方の行政単位を表すもので、「五十戸」をもつて「里(郷)」に編制される。

「年報」に記載ないが、「郷長」、「田木」、「山代」と書かれた墨書き土器も出土した(図版は、安田滋「神戸市宅原遺跡における官衙遺構」『古墳時代から古代における地域社会』第41回埋蔵文化財研究集会 1997.3 より転載)。

8世紀末~9世紀前半の大型掘立柱建物2棟と、その周辺から灰釉・縁釉陶器片なども出土し、官衙(かんが)の存在が推測されている。

「評」・「五十戸」・「郷長」と揃えば官衙(役所)の存在を否定するほうが難しい。ただ、「田木」・「山代」が分らない。一般的に所有者名を書いたらとすれば、人名になるが。

12世紀後半~13世紀にかけての掘立柱建物、井戸などから大量の木製品、陶磁器、墨書き土器、まじないに使った呪符木簡なども出土し、中世民衆の暮らしの一端がうかがえる遺物である。

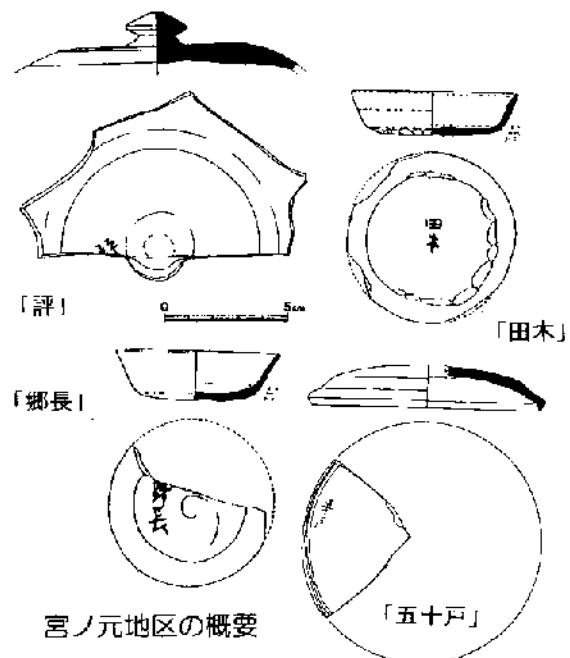
—「昭和63年度 年報」(1994年)—

深い溝から、異形須恵器である皮袋形提瓶(ていへい)の破片が出土した。近辺の北神第9地点の2号墳東埋葬施設からも、掌に載るくらいの皮袋形提瓶が出土している。皮袋は当時の最新ファッションかもしれないが、倭人には馴染み薄いバッグであつただろう。

—「平成2年度年報」(1993年)—

この調査においては、7世紀初頭~後半、相当な土木工事により土地の造成が行われたことが強調されている。

西豊浦地区(図の3)では、5世紀後半ころの溝で、杭列・護岸・井堀がみつかっている。



宮ノ元地区(図の1)はもっとも注目される遺物・遺構が発掘された地区で、「幡多(はた)」の実態はこれではないか!と思つた調査だった。報告書(『宅原遺跡 宮之本地区の調査』妙見山麓遺跡調査会 1986)が刊行されており、まず、報告書により紹介したい。

1986年調査は宅原一ノ宮神社の東側一帯で、南から北へ延びる舌状台地の岡公会堂周辺になる。幅1.5~2mの3本のトレントと、C区(250m<sup>2</sup>)と呼ばれた調査地が今回の紹介の対象地で、現在も調査された場所は、ほぼ確認できる。

この地区の舞台は大溝と掘立柱建物群。東西に20m強掘られた、幅2mのトレント(10T)が、大溝とその周辺を輪切りにした格好になった。したがって大溝は殆ど未掘で、田園の下にはまだ膨大な遺物が残されているはずである。

大溝は、台地の西側に入りこむ小支谷の湧水をかなり高い位置から引きこむ水路であり、集落内を斜めに貫流して台地の東側先端へ出るものと想定されている。幅広で(約6m)、比較的浅く(約1m)、底幅も広くゆるやかである。4世紀後半に掘られた溝が埋没した後、7世紀前半に再び掘り直された。台地の傾斜はかなりあり、55m南に掘られたトレント(13T)との落差は約2mあって、当初、水の流れは速かったであろう。

溝底は砂礫土で、この砂礫を覆うように灰黄色粘質土が堆積し、この層から日本最古とみられる

木彫面をはじめとする多量の木製品、自然木、馬の下顎骨、須恵器、土師器などが無秩序に検出されている。その後も堆積が進み、多くの遺物から遺跡の状態をうかがえる。中世には完全に埋まり、掘立柱建物が建てられていた。

古代の遺構は4期に分けられ、Ⅰ期は古墳時代前期の溝と竪穴住居が1基。

Ⅱ期は、200年余り放置されていた台地上に飛鳥時代前半(7世紀初頭)、竪穴住居からなる集落(10棟以上)が再開される。

Ⅲ期は、7世紀前半から中ごろ、竪穴集落を一掃して、掘立柱建物群が建てられる。この段階で意識的に村落のつくりかえが行われ、出土遺物から評(郡)衙に関連する集落とされる。

大溝は、周辺の竪穴住居群にあまり時期をおかず、それらの一部を切るようにして掘られている。遺物は7世紀初頭のものが出土している。

Ⅳ期は、8世紀代で、奈良時代になる。

#### ○大溝周辺の祭祀遺構

大溝から出土した遺物で注目されるものは殆ど祭祀に使用されたと考えられる。珍しい祭祀の場と推測される遺構から紹介したい。

にわ火(庭火)跡土壙か?

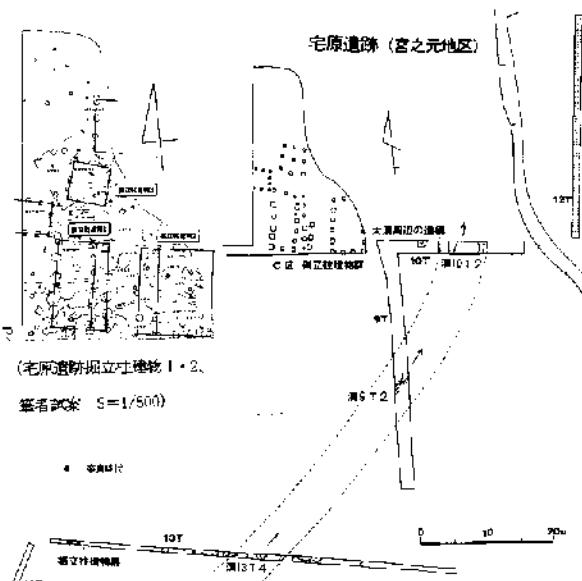
大溝の西辺肩部には円礫の集積が道状に見られ、それに接して方形の土壙が掘り込まれていた。時期は大溝と同時期とされる。土壙を掘り、礫をつめてその上で火を焚いており、焼土の中から完型の須恵器が検出された。溝には投棄された、多数の燃やした跡の残る割木片が見られ、「なんらかの祭祀行為に伴う焚火を行った場とどうえることが妥当」と指摘されている。円礫の集積は規模が違うが、最近の飛鳥での発掘例が思い浮かぶ。

奈良・平安時代、宮中の儀式において「にわ火」の焚かれた記録が残るようである。祭祀に火を伴うのは普遍的に見られることであるが、祭祀の場が後世に残ったのは土壙であったからか。

#### ○大溝出土の木製品

割木が出てきたので、木彫面以外の木製品をまず見てみる。これらの遺物は湛水中に投げ込まれた状態で、流れた痕跡はない。

割木。松をナタのようなもので縦割りしたもので、88点出土しており、26点が燃えさしであった。



松明(たいまつ)。檜を細く割って束ねたような状態で、一部の割木が炭化していた。他に、薪そのものとみられる自然木(幹・枝)や、檜材を杭状に削ったものも出土している。

人形(ひとかた)。3点出土したが、通常の人形とは容姿が少々異なる。「本例が7世紀初頭であることを念頭におけば、…定型化したものの前段階的な作例としてみることもできるであろう…」とされる。律令祭祀として定型化する以前の祭祀の復元は、きわめて貴重と評価できる。

他にも木製品は多様で、丸木弓、木釘、木串、木座、木錘(槌の子)、板、円形曲物(蓋)など。

人形はよく知られているように神靈の憑依物(よりしろ)で、穢れや疾病、罪科、災厄などを負わせて、川や海に流す類感呪術に使われる。人面墨書き器の使われ方も同じらしい。

弓、釘、松明も祓えの祭事に使われる遺物で、弓の弦を鳴らす光景は絵巻でよく見る。釘を打つのは、呪いのまじないでお馴染みだが、本来は鬼神や悪霊の調伏のための呪的行為であった。松明(火)も淨めや悪霊払いの役割をもっており、二月堂のお水取りの際、松明の燃えさしを持ち帰るのは、厄除け・鬼除けになると信じているからである。

これらの祭祀の祖型が外来のものか、倭の在来のものかは簡単に割り切れないが、従来見られなかった祭祀の形態がみられるようである。今、水辺の祭祀と渡来系集団との関連にも注目されるようになっている(図録『カミによる水のまつり』権原考古学研究所 2003年)。

### ○大溝出土の種子、草木

もも、すもも、あんず、やまもも、なつめ、ぶどう、くり、ゆうがお、まくわうり、なす、米などが出土しており、秋の儀式に使われた神饌とされる。これら栽培植物の収穫の季節から、祭儀の季節が特定されている。梅雨時、真夏、秋である。

他に、みやまびやくしんの葉が出土したことから、香木による香料的な効果も狙ったとされる。

### ○馬の下顎骨

溝底から7~8cm高い位置で出土した。下顎骨のみ完存し、資料化できない骨の小片が数点みられた。頭部以外の他の部位は調査範囲ではみられない。遺物は保存処理がなされている。

馬はオスで、中型馬のようである。松井章(奈文研)氏が計測されているが、コメントはない。

下顎骨のみであれば馬頭(馬首)を切断し、祭祀に使用した後、大溝に投棄したものか、と想像される。井上光貞氏は、「殺牛馬儀礼がわが國固有の思想とは異質であり、……公的祭式には、犠牲的性質がほとんどみられない」(『日本古代の王権と祭祀』東京大学出版会 1984年)と指摘されたように、きわめて渡来色強い土俗的ともいえる習俗による祭祀が行われたようである。

後述するが、奈良時代の溜池周辺からも、牛の歯、馬の歯が出土している。馬の殉葬、殺牛馬儀礼などについては、「住吉宮町古墳群(神戸市東灘区)」の紹介に際し3回連載した(『むくげ通信』200~202 2003.9~2004.1)。

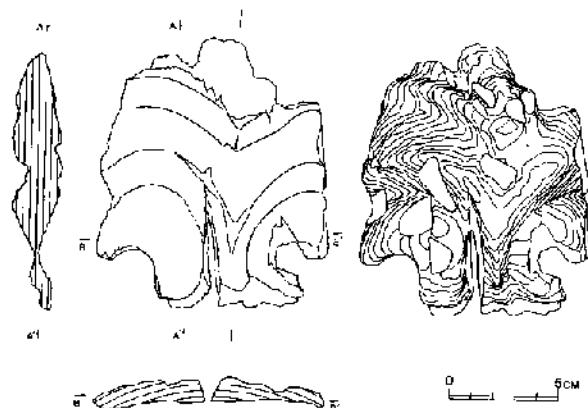
### ○木彫面

宅原遺跡でもっとも注目されたのが、7世紀初頭、百濟人味摩之(みまし)が伝えたとされる、伎楽面(ぎがくめん)にも関わる木彫面かもしれない。

大きさは、上下12.7cm、左右10.5cmであるから掌大である。残存部分は、左右の眼窓、額の生え際から鼻梁上半部である。もし、顔全体を覆う面ならば、欠失した部分の方が多いことになる。

眼孔の位置が水平であることなどから、人が被ることを目的に作られたとされる。

目や眉の周辺に白い描線が認められ、彩色されていた可能性もある。この面の形式については、伎楽面(ぎがくめん)式の頭までかぶる形式ではなく、顔面の可能性が強いらしい。



木彫面 平・断面図 1mmコンタ図 (測図・国際航業株式会社)

10トレンチ溝10T-2-Ⅱ層出土木製品

報告書の記述によれば、伎楽面とも異なる印象を受け、飛鳥仏的な量感を感じるそうである。

「……生え際の隆起線という表現は、法隆寺献納宝物伎楽面の巖峯(いんぽう)などにみられるが、眉根を寄せた忿怒の相に伴うものであり、その他の伎楽面にみられる額皺の表現とは異質である」が、「きわめて優美な眉線の表現によって、穏やかかな仏像的な雰囲気を醸している。……」。

また、裏面の仕上げの状態から、祭祀にあたって作られる一回性の仮面である可能性もある。

材質は「ヌルデ(ウルシ科)」であり、飛鳥・奈良時代の伎楽や雅楽の木彫仮面の多くが、樟、桐、檜などであるのに対し特異とされる。

古代の仮面の制作者については、「古楽面の制作は、すくなくとも鎌倉時代までは、仏像彫刻のそれに並行するものであり、彫刻としての表現や材質技法に共通するところが多く、これら古楽面が間違いなく仏師によって制作されたものと考えてよいようである。」(浅井和晴「法隆寺伎楽面小考」・西川杏太郎「古楽面の制作技法について」『佛教藝術 特集 仮面』161 1985年)、といわれる。

宅原遺跡群出土品に仏教に関連する遺物は皆無のようだが、制作作者には渡来系の仏師集団ともネットワークをもつ人物が想定される。

いちばん問題になる年代については、出土地点が大溝のほとんど低部といってよい、溝底から8cm浮いた位置であり、同じ層から出土した須恵器の型式(TK217古段階)から7世紀初頭とみられている。この大溝は比較的速やかに堆積が進み、7

世紀末には姿を消すことから、この年代観はまず動かすことができない、とされる。

#### ○味摩之・智聰と伎楽(ぎがく・くれがく)

伎楽は、古代チベット・インドの仮面劇に源流があり、西域を経て中国南朝、さらに百濟に伝わった樂舞。その舞は厳肅なものではなく滑稽卑俗だったそうである。仏教の伝来と相前後して倭国に伝えられ、常に仏前の供養の場において演じられた。伎楽はサンスクリットで音楽を意味する語。

推古紀二十年(612)には、百済人味摩之(みまし)の渡来記事があり、「吳(くれ)に学びて伎楽(くれがく)の舞を得たり」とある。この記事は築庭工人の渡来とセットで記されており、7世紀初頭の飛鳥地域の雰囲気がうかがえる記事である。

『新撰姓氏録』には、和薬使主(やまとのかくしののみ)の条に、欽明天皇の時、智聰が伎楽調度一具(ひとそなえ)を携え渡來したとの異説を記す。

宅原遺跡から出土した木彫面は、法隆寺などに伝来する伎楽面とは異なるようだが、これら文献に記された時代の流れの中で、祭祀のため作られたものであろうか。

#### ○亀形石製品

木彫面と並んで飛び抜けて珍しい出土品が亀形の石製品。現在、類例が知られない。

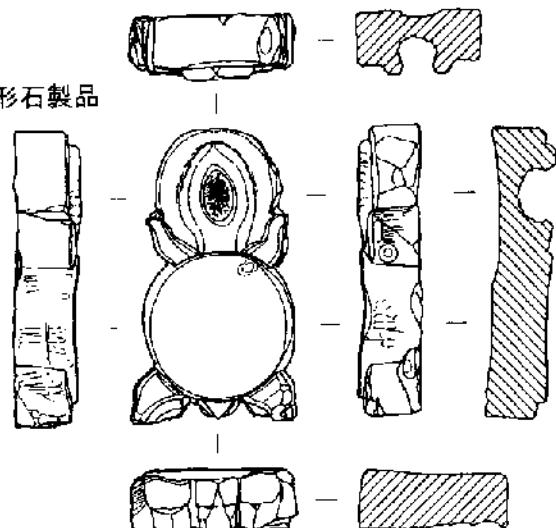
飛鳥時代初頭の堅穴住居(#5)が完全に埋没した後の生活面での遺物とされ、年代は7世紀後半から末ごろと推定されている。

大きさは、最大長13.1cm、最大幅7.3cm、最大厚さ2.8cm。体部は直径6.3cmの正円形で、上部には頭部と前足を一体に表し、下方中央に尾、左右に後足。亀形で、かわいい掌大である。

一見すると、正円形の体部から飛鳥酒船石(さかふねいし)北方遺跡で出土した亀形石造物(石槽・水盤)を連想させるが、飛鳥の亀は全長約2.4mもの巨大な亀である。知人に、「まあ、飛鳥亀の…タマくらいの大きさかな」と感想をもらしたところ、亀にそんなものはないと否定された。

ところで、「…、ただ亀の造形において、甲羅を正円につくるのはきわめて少なく、…天寿国繪帳(てんじゅこくしゅうちょう)の亀甲図が、…新発見の亀の形状に影響を及ぼしたものと思われる。…」(大橋一章「新発見の石造亀形水盤について」)

亀形石製品



『佛教藝術』250(2000.5)と指摘されており、和田萃氏も同趣旨のことを述べられている(「二つの亀石」『東アジアの古代文化』105(2000年))。

正円形の甲羅をもつ亀の類例はわずかに3例のみであり、デザインの祖型は共通していたのではないかと思われる。

宅原遺跡出土品は、軟らかく緻密な粘板岩を比較的粗く加工し、体部は平滑面(磨面)があり、頭部分には穴(水溜)があって、立派な石硯の形態をしている。報告書では、日本で石硯が生産されるのは鎌倉時代以降であるということで、用途不明の亀形石製品とされている。

確かに、飛鳥・奈良時代はもっぱら陶硯が使われ、石硯が中國から将来されたのは9世紀後半ころらしい(水野和雄「日本石硯考—出土品を中心として—」『考古學雜誌』70-4 1985)。

しかし、図版がないのでどのような形態の亀なのか分らないが、亀形の硯ははやく造られていた。

「六朝時代には亀形の硯が造られた。背甲に富む部分を硯にし、首尾と四足を具えた完全な亀形をした硯である。この亀硯も硯としての性質上、あきらかに亀と文字との関連によって造形されたものと思われる」(小杉一雄「造形に見られる亀と文字との関係」『福井博士頌寿記念 東洋思想論集』1960年)。六朝は中国の江南文化であるから、伎楽と同じルートで倭国とつながっている。

亀形石製品が硯かどうかは類例を待つとして、亀形石製品という特異なデザインをどこで知り、造形したのか、その背景を考えてみたい。

宅原の亀にもっとも形状の近いものは天寿国繡帳の亀甲図で、全長10cmにみたず、わずかに小振りである。天寿国繡帳の制作年代は、聖徳太子が亡くなった推古三十年(622)直後と確定しており、同時代といつてもいい年代である。

制作全体を取り仕切ったのは秦氏の椋部(くらべ)秦久麻であり、刺繡のための下図を描いたのは、東漢末賢・高麗加西鑑・漢奴加己利など、すべて渡来系工人集団であった。プロデューサーの椋部秦久麻は、当然、正円の甲羅をもつ角の図を知っていたであろうし、他にも様々な下絵のサンプルを持っていたのであろう。

宅原遺跡宮ノ元地区で祭祀を行った集団は、このような飛鳥の地の渡来系集団と擬制的な親縁関係をもっており、亀形石製品や木彫面を作れたのではないか、と考えられよう。

その際、猪名川河口(現在のJR尼崎駅周辺)に置かれたと推定される猪名ミヤケが中継地点になつたのではないか。聖徳太子主導で設立されたとされる猪名ミヤケは、秦氏の率いる渡来人集団(猪名部氏・猪名部・倉氏など)によって開発され、設置後の管理・運営も彼ら渡来人の手に委ねられた、と推測されている(寺岡「猪名庄遺跡(尼崎)をめぐって—猪名部の居住地はどこか—」「むくげ通信」192 2002.5)。椋部秦(くらべはた)、倉(くら)と、秦氏の線がつながるようである。

#### ○掘立柱建物群

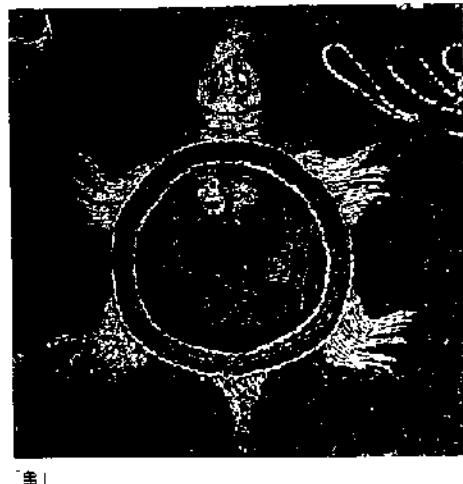
C区と呼称された調査地で、7世紀前半から中頃の掘立柱建物4棟検出され、鄰家(ぐうけ)に関連する館(たち)の建物群の一部と想定されている。

掘立柱建物1は、南北5間(8.80m)×東西2間(3.50m)、東面に幅1間(1.5m)の庇をもつ。建物1の東側に建物2が並列している。こちらも、南北5間(8.30m)×東西3間(5m)の大規模なもので、これら建物群はその規模や庇をもつことからみても、官衙に関連するものであろう。平田博幸氏の復元試案を紹介しておく(「律令期のムラ」『研究紀要』創刊号 兵庫県教委埋蔵文化財調査事務所 2001年)。

宮ノ元地区 溝池遺構(堤・樋・余水吐)

墨書き土器(「池邊」「田木」「五十戸」)

飛鳥時代の溝 馬齒



天寿国繡帳 亀甲図

中国道に沿つて北側に道路が新設(市道長尾線)され、発掘調査が実施された。調査は2年度にわたった。岡堂池のある谷と、東西の丘陵裾である(「平成3年度 年報」1994年、「平成4年度 年報」1995年、「平成4年度 現況資料」)。

西側の丘陵裾では、奈良時代と推定される大規模な総柱建物が建てられていた。東西3間(6.7m)×南北5間(12.5m)で、宅原遺跡群内では屈指の規模になる。総柱建物は倉庫といわれ、都衙遺跡には大規模な倉庫群を伴うが、現在までまとまった遺構はみつかっていない。

奈良時代の溜池遺構(堤・樋・余水吐)

谷部には、東西2ヶ所の流路が検出され、西側の、谷状の流路の上流には現在の岡堂池がある。この西側の流路の谷口部分に、幅約13m、基底幅約6m、高さ約80cmの堤が築かれていた。

奈良時代前期(8世紀前葉)に築造され、その後、池底の堆積土を浚渫し、堤を修築しながら、鎌倉時代まで長く利用されている。

堤に関連する遺構には、樋2ヶ所、余水吐(よすいはけ)2ヶ所などがあり、余水吐01と樋01はセットで、平安時代後期の修築時に作られたもの。

樋02と余水吐02は、奈良時代当初のものと推定され、当時の土木技術の実態をうかがえる貴重な遺構である。樋はヒノキ属の材を使用し、樋身は長さ約180cm、幅13cm、高さ6cmの材に半円の割り込みを入れたもので、樋蓋がセットになる。池の規模からすると、これで十分なのであろうか。

なお、樋の北端から動物の歯(牛歯か?)が出

土している。

余水吐02の規模は、長さ4m、幅80cm、深さ10cmほど。水位調節用と思われる板6枚が溝を横断して打ち込まれていた。

#### 墨書き土器 人面墨書き土器

堤の下層および溜池堆積土の下層から、奈良時代前期の土器類が多量に出土した。現地で故意に打ち割られたような出土状況を示している。

このなかに、「池邊」・「田木」・「五十戸」・「罈」などと墨書きされたものがあり、人面墨書き土器もあつた。火を焚いた跡と思われる炭の広がりが数ヶ所確認されており、これらの遺物・遺構は堤の地鎮に際し使用されたものと推定されている。

#### 飛鳥時代の流路 祭祀跡 馬歯

堤築造時の整地土の下層およびその下層の洪水砂層を除去すると、飛鳥時代の地表面と溝が姿を現す。谷底を蛇行して流れるこの溝は幅1mの浅いものであるが、木製品・建築部材・手斧屑が土器などと共に大量に出土した。

「溝沿いの平坦面では、火を焚いたことを示す炭層が確認され、破碎された須恵器、馬の歯などが木製品と共に出土した」とある。立木の株が、当時生えていたままの状態で発掘されている。

馬歯の出土状態がよくわからないが、馬歯のみが単独で溝の傍らから出土したとは思えないで、なんらかの遺構に伴って出土したものであろう。しかし、水の祭祀に馬の犠牲が伴ったのは間違いない。おそらく、特別な祭祀にあたっては殺牛馬儀礼が行われたのである。

#### 周辺地区の伝承について

『宅原遺跡 1986年』には、興味深い伝承が記されているので紹介しておきたい。

有馬郡には高坂池(長尾町上津)、菅生池(須古池とも)、長尾町宅原)、福島池(三田市福島)という三つの大池があつて、奈良時代、行基によって開かれたという伝承が伝わるそうだ。

それによると、行基は、有馬温泉をつくった後、さらに有馬郡中央部の開拓に着手し、この地方に居住していた秦氏の集団を使役してこれら三つの大池を開いたという。また、有馬から平田へつなぐいわゆる百間樋の溝というのも行基が杖をひきずった跡と伝える。

ところが一方、長尾町宅原の宮ノ元にある一ノ宮大明神社に蔵する「摂津有馬郡宅原庄 產神正一位 一ノ宮大明神縁起」(正徳四年撰)によると、菅生大池は牛頭天王(素盞鳴)が里人川原村主(すぐり)に神託を授けて開かせたもので、のちに社殿を建立し美刀志呂田(ミシロタ・神田)を獻じて祀ったのが一ノ宮明神であるという。

行基が秦氏の集団を率いて池を作るとというのは、昆陽池(伊丹市)などもその可能性があり、また、川原村主の村主は渡来系氏族の姓(かばね)であるから、二つの伝承は共に渡来系集団が長尾川流域を開拓したことを伝えるもので、興味深い。将来、「秦」や「川原」と書かれた墨書き土器・木簡が発掘されることを期待したい。

#### おわりに

摂津国有馬郡の幡多郷(里)は、秦氏の集住地ゆえに名づけられたものではなかったか、とかねがね思っていた(たいていの人も思っている)。

幡多の地の中心は長尾川流域の宅原遺跡群で、飛鳥時代に画期があり、大々的に開拓されたようである。遺跡からは郡(評)衙あるいは郷(里)の役所に関連する墨書き土器が出土し、遺跡の知名度はあがったが、秦氏の存在を示す墨書き・木簡(もっかん)はみつかっていない。

そこで、現在知られている遺物から渡来系文物を見直してみると、共同体の維持・再生産を保障する祭祀において、渡来系集団と深く関連する習俗がみられた。とりわけ、殺牛馬儀礼は倭の習俗と違いものである。

宅原遺跡群を一躍有名にした木彫面からは、飛鳥地域の最新の百濟文化に関わっていた、仏師など渡来工人集団とのネットワークの存在が推定できるのではないか、と考えられる。

亀形の石製品(石硯であってもよい)は、正円形の体部(甲羅)をもち、きわめて稀な遺物で、天寿国繡帳の亀甲図のデザインと共通する。

天寿国繡帳は秦氏の同族である椋部秦久麻をチーフとする渡来工人が制作したもので、亀形石製品は彼らが持つデザインを使って作られた可能性がある。飛鳥、猪名ミヤケ、宅原と、秦氏のネットワーク網がつながっていたのではないか。

幡多の地名の由縁を以上のように考えたい。